

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：34604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381242

研究課題名(和文) 小学校国語科・読むことの単元計画作成チェックリスト開発に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Development of The Checklist of Developing Plan for Units of Reading Japanese Texts in Elementary School

研究代表者

鎌田 首治朗 (KAMADA, Shujiro)

奈良学園大学・人間教育学部・教授

研究者番号：40599354

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、小学校・読むことの単元計画作成チェックリスト(CL)を作成し、その使用の影響、有効性を、教員、児童を対象として科学的に明らかにすることであった。初年度は、小学校教員へのヒアリングと理論的考察を踏まえ、CLを作成した。その後、教員のCL使用により以下の3点が明らかとなった。国語科授業作りでの教員のCL使用有無によって、実際の授業前後の児童の自己評価、内発的動機づけが高まること。教員のCL使用の有無により、教員の授業作り観が変化し、多忙感の訴えが減少すること。長期的なCLの使用が教員の授業作り観を高めること。つまり、CL使用は教員、児童の両方に好影響をもたらすことが示された。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to scientifically elucidate the impact and effectiveness of the development and use of "The Checklist of Developing Plan for Units of Reading Japanese Texts in Elementary School" (CL) in teachers and pupils. In the initial year, CL was developed based on interview with elementary school teachers and theoretical considerations. After that, the following 3 facts were revealed by the use of CL by teachers: 1. The use of CL by teachers for Japanese language class development increases pupils' self-evaluation and intrinsic motivation before and after actual classes; 2. The use of CL changes perception of class development by teachers, resulting in decrease in complaints about being busy; 3. Long-term use of CL improves perception of class development by teachers. In summary, those facts showed the use of CL brought favorable effects to both teachers and pupils.

研究分野：教科教育学

キーワード：国語科授業改善 単元計画モデル 授業モデル

1. 研究開始当初の背景

「国語科の読むことの指導，とりわけ文学作品をどのように指導すればよいのか」という疑問は，80年代中頃の読者論の国語科授業への導入以降，学校，教師の中に今も存在する難しい課題である。その原因の一つとして，日本の教師が日々指導に使用する国語科教科書を基にした単元（授業）計画作成のスタンダードに関する提案が未だ十分でないことが挙げられる。

国語科の単元（授業）計画作成のスタンダードを求めるにあたり，第1に教育評価が重要である。中でも，目標分析は，授業づくりのシステマティックな方法として，日本の学校現場に適用されているため，重要と考えられる（梶田，1986）。梶田（2006）は，目標分析が「目標の明確化」を「具体化，現実化」し，単元目標達成のために必要不可欠な「中核目標」を明確にするために，『単元目標分析』『単元目標構造図』『指導順路案』『単元指導計画』『各授業時限の指導略案』の順に行うことを述べている。

このような考え方も背景に，単元（授業）計画作成のスタンダードに関する提案がすでにいくつか行われている。たとえば，鳴門教育大学（2006）「授業構想力評価スタンダード（国語科）」（以下，「授業構想力」）が挙げられる。「授業構想力」は，教員養成大学に共通する克服すべき課題の克服を目指して作成され，教育実践力を客観的に評価するための尺度と具体的な方法が確立されていなかったことへのアプローチともいえるものである。また，教員養成という目的では兵庫教育大学による「教員養成スタンダード（小学校版）」がある。国語科指導にとっては，その中の「授業構想力」が具体的で，参照できる。ただし，これらは，国語科教科書活用を前提にした単元計画づくりにおける目標の具体化，および，言語活動の習得・活用指導，多読と学習者の人間形成の具体化が十分でない。

このような要素を満たし，教師が自らの思考，実践を通して自身の読むこと観，授業づくり観を生み出し発展させていくという，主体的，能動的思考を目指すためのスタンダードとして，本研究では，「小学校国語科・読むこと単元計画作成チェックリスト」（以下，CL）を作成し，その効果を教員，児童両面で検証することを目的とした。CLの背景となる読むこと観には，山元（2005）が提案する「読むという行為」を「読者とテキストとのあいだの葛藤であり，対話」「読者側の状況モデル（世界構造）とテキストの状況モデル（世界構造）を重ね合わせる行為」としてとらえる読むこと観がある。

このような考え方は，読書行為を弁証法的に解明しようとしたイーザー（1982）にもみられる。テキストによる「否定」を受けた単一の正解が存在しなくなる難問に直面すると個人は，自らの「世界構造」を基にした「自

分の解」をテキストとの「対話」を通してつくり出さざるを得なくなる。「自己」という「世界構造」を基にする以上，読むことによって生まれる読者の解釈や批評は，個々の「世界構造」を反映し多様なものとなる。このような解釈や批評を生産する「葛藤」や「対話」や「重ね合わせ」は，読者による主体的・能動的な読む行為でなければ機能しない。他人事で読んで非主体的・受動的行為者では，「自己」という主体の「世界構造」を基にすることは難しく，大きな「葛藤」に直面した途端に思考し続ける意欲を失い，読みが停止してしまいかねない。そこでは，「自己観察を経て自己解明に至ること」に取り組もうとする各人の「自己に対する意識」が問われている。

国語科においては，読むこと観を中核に，言語活動を手立てにして，授業の中で子ども達が作品を自力で読み解釈する時間と，その解釈を主体的に磨く時間の保障が必要である。子どもたちが，作品との「葛藤」「対話」「重ね合わせ」を行うには，その契機となる学習課題が求められ，それは教師の読みなしには実現しない。また，子どもたちが単元で取り組む言語活動で自分の解釈を表現することができるためには，その言語活動をスムーズに行えることが求められる。

CLは，上述の目標分析の手法，読むこと観，を背景とし，教師の主体的思考を支え，阻害することがないように単元（授業）計画づくりの思考のポイントを教師が自問自答できるチェック項目として示し，項目ごとに教師の主体的な思考・判断を求めることが可能となるよう作成される。

2. 研究の目的

日本の国語科授業研究においては，様々な研究者，実践家による提案が行われる。しかし，授業づくりの主要な位置を占める単元計画作成についての総合的な提案，とりわけ文学作品を教材とする単元におけるそれは，未だ十分とは言えない。本研究では，イーザーの読書論と教育評価における目標分析の手法を前提に，文学的文章を教材とするCLを開発し，その効果を協力校において検証することを目的とする。また，本研究では，CLの検証に当たり，教員・児童の自由記述のみでなく，心理学的な測定尺度も組み合わせ，CLを検証する。

3. 研究の方法

本研究は，3つの研究手法を用いて行った。研究1は，イーザーの読書論を基に国語教育学（主に田近殉一，井上尚美の論考），教育評価の理論（主に梶田観一の論考），認知心理学の知見を活用し，文献研究により，CLの具体的項目を作成した。研究2では，小学校教員の実際の授業づくりにCLを利用するかないかで，児童の動機づけ，認知がどのような影響を受けるかを検討した。研究3では，

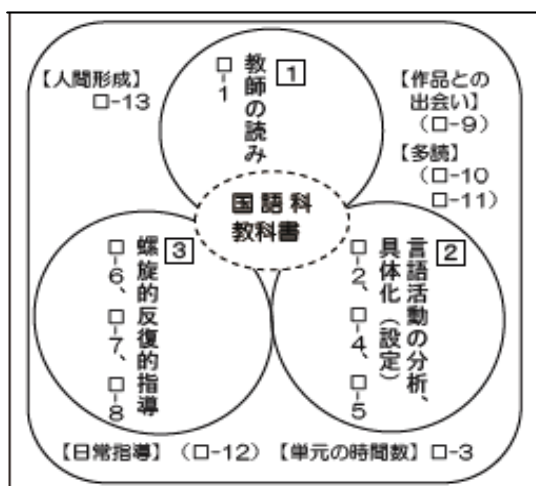
小学校教員 2 名が CL 使用によって授業づくり観がどのように構成され、変化するかについて、「PAC 分析実施法」(以下、「PAC」)によって考察することとした。「PAC」は、内藤(1997)によって確立された質的データを統計的に分析する方法である。その実施手順は「当該テーマに関する自由連想(アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、参加者によるクラスター構造の解釈やイメージの報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を測定・分析」である。

4. 研究成果

(1) 研究1: CL の作成

表 1 に、CL の構造と主な項目を示した。CL は、国語教科書活用を前提に 3 つの柱を教師に計画段階で求める構造をもつ。それが、「1 教師の読み」「2 言語活動の分析、具体化(設定)」「3 螺旋的・反復的指導」である。3 は言語活動習得のためにあり、子どもたちが繰り返し言語活動に取り組める反復と、その反復が単調でなく言語活動を「わかる」から「できる」へと確実に向上できる螺旋的なものであることを教師の指導に求める。このために、教師は 2 で単元で取り組む言語活動を明確にすることを求められる。1 は、学習課題を準備するためだけでなく単元(授業)計画をつくり実践するために欠かせない。

表 1 CL の構造



これら 3 つの柱ごとに、学校、教師の使い勝手を考慮した具体的な単元設計支援ツールである CL 項目を作成した。たとえば、「1 教師の読み」であれば、「教材文を読んで謎を見つけ、その謎を自分で読み解いていますか。」などの項目で構成される。「2 言語活動の分析、具体化(設定)」であれば、「学習モデルができるためのポイントを自分の言葉で 3 つ程度にまとめましたか。1 次の終わりか 2 次の初め(場面毎の読みに入る前)に、学習モデルを見せ、子どもたちと学習モデル

ができるためのポイントを子どもたちの言葉でつくる時間を計画できていますか。」といった項目で構成される。「3 螺旋的・反復的指導」であれば、たとえば、「子どもたちがミニ学習モデルのやり方がわかる、できるようになるための 1 場面の螺旋的・反復的指導の計画は、できていますか。ノという問いで構成される。さらに、螺旋的・反復的指導例として、1 場面の初めから数行を、教師がお手本をやってみせる。続く数行を、教師と子どもたちみんなでやってみる。続く数行で、挙手した子どもや指名した子どもがやってみる。子どもたちの理解、実態に応じて、必要な量を繰り返すこと、この時期の子どもたちの言語活動を褒めることを心がける。」といった例も提示されている。

上記 3 つの柱に加えて、作品との出会い、多読、日常指導といった項目、さらには、人間形成にまで、CL は具体的な手法を提案する。授業実践に明日から使用できるような、わかりやすさ、活用しやすさを備えており、このような小学校国語科のツールは他に存在せず、当該研究分野に一石を投じるものと考えられる。しかし、実際に CL を使用することが、教師、児童に及ぼす影響については、研究 1 のみでは明らかにならないため、以降の研究を推進した。

(2) 研究 2: 教師の CL 使用有無が児童の認知、動機づけに及ぼす影響の検討

CL 使用有無による違いを検証するために、京都府内の小学校 3 年生の 2 クラス、児童 70 名(男子 25 名、女子 45 名)とそれぞれのクラス担任教員(女性 2 名)を対象に調査を行った。調査は、「物語を読んで、しょうかいしよう / モチモチの木(齊藤隆介作)」(光村図書・三年)の単元学習指導を通して行った。2 クラスは、1 つが CL を使用せず指導書を基に単元指導を展開した担任(以下、「無担任」)のクラス(以下、「無クラス」)であり、1 つが CL を使用して単元設計と指導を展開した担任(以下、「有担任」)のクラス(以下、「有クラス」)であった。

単元前後に質問紙を用い、児童の学習意欲および動機づけを測定した。学習意欲は、下山剛ら(1983)の東京学芸大学意識学習意欲検査(簡易版)を一部改変して用いた。また、児童の学習への動機づけには、Harter(1981)30 の内発的・外発的動機づけ尺度の邦訳版である桜井茂雄(1983)の尺度を使用した。

表 2 に、「CL」使用有無クラスの単元前後における学習意欲の各尺度得点の平均値(標準偏差)および分散分析の結果を示した。結果として、児童の達成志向、自己評価について、統計的に差異が認められた。また、内発的動機づけは、因果律(主体的に学習を行う程度)においてのみ、統計的な差異が認められた。研究 2 から、「無クラス」は単元前後で自己評価は異ならないが、「有クラス」では単元前と比較して単元後の自己評価が

高かったこと、「無クラス」は単元前後で因果律が異ならなかったが、「有クラス」では単元後に因果律が高いことが示され、少なくともこれらの項目は、教師のCL使用が児童の意欲や内発的動機づけに好影響をもたらすことを示している。本研究で操作したのは、CLによる教師の授業作りのみであり、如何に授業作りの意識化が児童の認知、動機づけに影響を与えるかが示されたといえよう。

表2 「CL」使用有無群の単元前後における学習意欲尺度得点の平均値(標準偏差)および分析の結果

	平均値(標準偏差)		自由度	F(自由度)		
	単元前	単元後		前後	クラス	交互作用
自主的学習態度						
	単元前	単元後				
CL使用無クラス(N=34)	2.03 (0.83)	2.99 (0.66)	1.64	61.862*	1.143	1.556
CL使用有クラス(N=32)	1.70 (0.91)	3.02 (0.87)				
達成志向						
	単元前	単元後				
CL使用無クラス(N=31)	2.55 (0.89)	3.12 (0.67)	1.59	52.198*	1.959	6.466*
CL使用有クラス(N=30)	2.08 (0.82)	3.27 (0.63)				
責任感						
	単元前	単元後				
CL使用無クラス(N=33)	3.37 (0.70)	3.30 (0.57)	1.63	0.368	1.959	0.632
CL使用有クラス(N=32)	3.45 (0.64)	3.45 (0.71)				
復讐性						
	単元前	単元後				
CL使用無クラス(N=31)	3.29 (0.72)	3.30 (0.71)	1.61	0.560	0.609	0.737
CL使用有クラス(N=32)	3.23 (0.84)	3.07 (1.01)				
自己評価						
	単元前	単元後				
CL使用無クラス(N=33)	2.67 (0.73)	2.59 (0.87)	1.62	2.203	3.000†	5.272*
CL使用有クラス(N=31)	2.75 (0.93)	3.15 (0.76)				
失敗回避傾向						
	単元前	単元後				
CL使用無クラス(N=33)	1.90 (0.85)	1.90 (0.83)	1.63	0.565	2.22	0.565
CL使用有クラス(N=32)	2.22 (0.80)	2.07 (0.88)				
反持続性						
	単元前	単元後				
CL使用無クラス(N=33)	1.85 (0.81)	1.87 (0.84)	1.62	0.143	4.434*	0.196
CL使用有クラス(N=32)	2.10 (0.87)	2.42 (1.02)				
学習意欲値群						
	単元前	単元後				
CL使用無クラス(N=33)	1.39 (0.51)	1.57 (0.77)	1.62	2.228	5.225*	0.002
CL使用有クラス(N=31)	1.77 (0.84)	1.94 (0.98)				

*p < 0.05, †p < 0.10

(3) 研究3: CLの使用有無が教師の授業作り観に及ぼす影響

研究2で、単にCLを参照しながら授業作りを行うかどうかのみで、実際の授業前後の児童の認知・動機づけが向上することが、統計的な差異として検出できた。では、CLの使用有無は、教師自体の授業作り観にどのような影響をもたらしているのか。研究3では、質的データを統計的に分析可能な「PAC」を利用して、2名の小学校教師のデータを分析した。具体的には、「国語科の単元計画づくり、授業づくりについて、大切なことは何ですか」という質問に対する参加者の自由連想から、「PAC」の手法に則り、参加者の授業作り観を統計的手法であるクラスター分析を用いてデンドログラム(表3,4)として示した。その後、参加者と研究者がそれらのクラスターを協議により解釈し、各参加者の授業作り観を明らかにした。

表3に、CLを使用していない参加者A(以下、A)のデンドログラム、表4に、CLを1年半使用した参加者B(以下、B)のデンドログラムを示す。表4のクラスター1で、Bが

「子どもたちと国語科授業をつくる喜び」を述べているのに対して、表3クラスター1でAは「単元目標達成、学習課題をどうすればよいのかという悩み」を述べている。また、クラスター2で、Aが「説明文でやる気を引き出せない」と悩むのに対し、Bは「児童が書いた文章を読んで、児童の内面を知り、児童理解が深まる楽しさ」を述べた。これは具体的に何を指すのか質問したところ、Bは自分の予想した児童の反応よりも質的に高い、生き生きとした児童の表現に触れたときの感動の大きさを述べ、自分の児童理解が授業を通して深まっていくこと、授業を通して児童理解の大切さを実感できたことを述べた。これは、表1に記載した、CLの構造の中の、13(【人間形成】)と関連が深い。Bが述べた「指導書から、その単元が何時間扱いであるかを知り、1次、2次、3次にどのくらいの時間を使うかを考えて、授業を組み立てる」には、表1の3(【単元の時間数】)が反映していると考えられる。

表4クラスター3では、Bの述べていることにCLが反映していると考えられる項目が多く見られる。「てびきの、『モデル』にあたる部分を再度読み、その単元の出口が何であるかを考える」という項目、「学習モデルのポイント」づくりをBが授業づくりの上で重視していることを示す項目、そして「モデル文、そのモデル文の分析から、その単元の言語活動を何にするか考える」という項目には、表1の2、4、5(2言語活動の分析、具体化(設定))が反映していると考えられる。Bに「研究授業に向けて、年間計画、繰り返しを意識する」の「繰り返し」は何を意味するのか質問したところ、Bは年間で何回言語活動を繰り返せるかということと、学習指導要領の指導事項を何回繰り返せるかということの2つを述べた上で、CLの螺旋的・反復的指導の重要性を述べた。表4クラスター4の「モデルを実際に自分が作ってみる」という項目には、表1の2.1(『学習モデル』が教科書にない場合は、自分で作成する)が反映し、「本文を読むのとは別に、その教材のなぞを考える」という項目には、表1の1(1教師の読み)が反映していると考えられる。

参加者Bは、Aとは対照的に国語科の授業づくりに展望をもち、単元づくりや授業づくりに手ごたえを感じている。BはCLの項目を自問自答し、Aに見られた「何を指導すればよいのかがわかりにくい」というレベルの悩みを感じていない。

このように、CL使用による、教師の国語科授業作り観の明確化と、それによる授業に対する迷いや悩みの解決が、研究2で見られたような、CL準拠の授業が児童に及ぼす好影響をもたらすものと考えられる。本研究のように、具体的なチェックリストに基づき、教師の授業づくり観の変容と児童への授業の効果等を体系的、統計的に分析した研究は少なく、

これらのエビデンスを基に、CLをより普及させることで、教師が主体的に国語科授業改善を進める体制作りが今後可能となろう。

表3 CLを使用していない教師の授業作り観

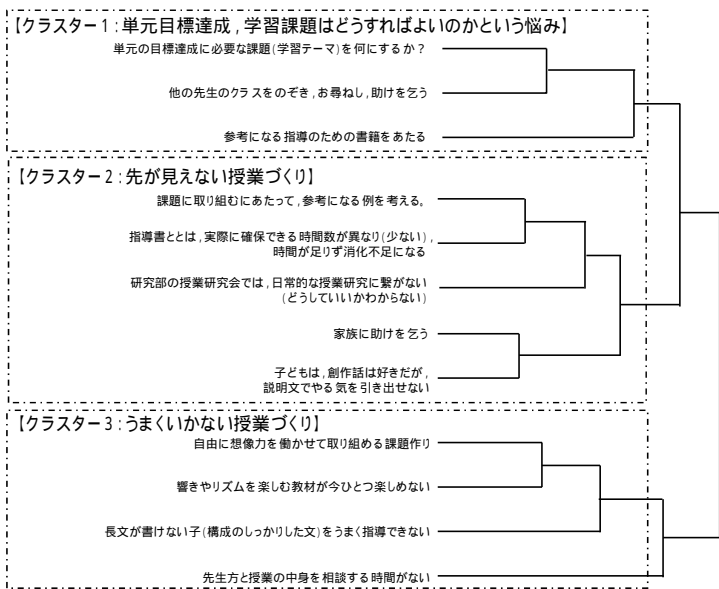
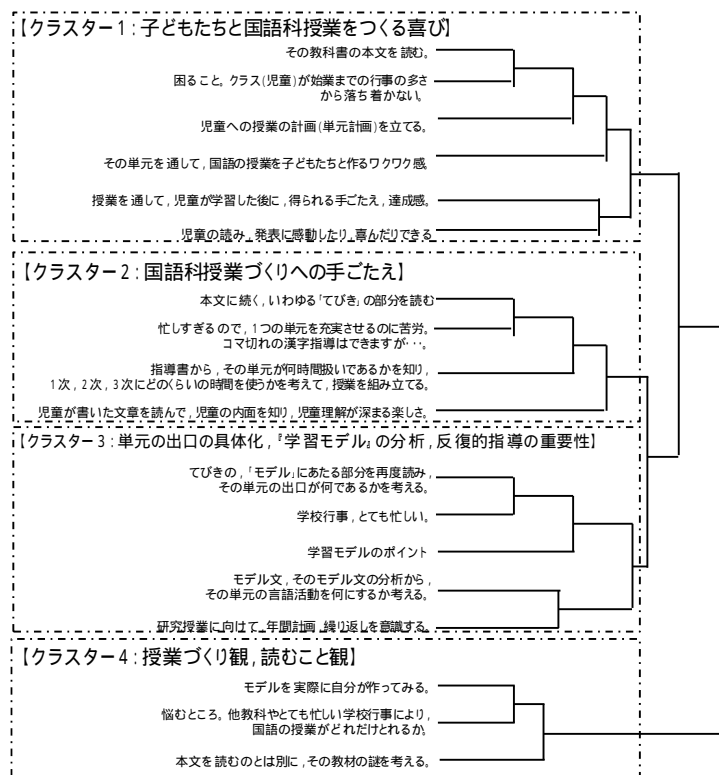


表4 CLを使用している教師の授業作り観



引用文献

梶田 叡一、下館市立下館小学校、形成的評価と授業改善 / 形成的評価による学力保障と成長保障、1986、明治図書
梶田 叡一、授業力を磨く、教育フォーラム 37 号、2006、金子書房
鳴門教育大学 (2006) 「授業実践力評価ス

タンダード (国語科)」
http://www.naruto-u.ac.jp/05_kyoumu/0555_gp/pdf/standard/kokugo.pdf (2016年8月15日確認)
兵庫教育大学 (2012) 「教員養成スタンダード (小学校版)」
https://www.hyogo-u.ac.jp/files/standard_syou.pdf (2016年8月15日確認)
山元 隆春、文学教育基礎論の構築 - 読者反応を核としたリテラシー実践に向けて、2005、溪水社
ヴォルフガング・イーザー、饒田収訳、行為としての読書、1982、岩波書店
田近 洵一、国語学力の構造と目標分析、全国大学国語教育学会 『国語科教育研究 2 国語科評価論と実践の課題』、2、明治図書、1984、40
井上 尚美、国語の授業方法論 / 発問・評価・文章分析の基礎、2、一光社、1983、146
内藤 哲雄、『PAC 分析実施法入門: 「個」を科学する新技法への招待』、ナカニシヤ出版、1997
下山 剛、林 幸範、今林 俊一、黒木真由子、塚田 洋二、宮本 光博、曾我部 和弘、大塚 敬吾、前原 辰信、学習意欲の構造に関する研究 (2) 学習意欲の類型化の検討、東京学芸大学紀要 1 部門、34、1983、139-152
桜井 茂男、高野 清純、内発的-外発的動機づけ測定尺度の開発、筑波大学心理学研究、7、1985、43-54

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)
鎌田 首治朗、「小学校国語科・読むこと単元計画作成チェックリスト」の使用有無が教師の授業づくり観に及ぼす影響の研究、人間教育学研究、査読有、第4号、2016、pp.33-41、
<http://id.nii.ac.jp/1413/00002582/>
鎌田 首治朗、小学校における「読むこと」授業の目標分析試案の作成と支援ツールの有効性、人間教育学研究、査読有、第3号、2015、pp.7-15、
<http://id.nii.ac.jp/1413/00000447/>
〔学会発表〕(計4件)
鎌田 首治朗、『読むこと』の授業のための目標分析試案 (4) 小学校国語科『読むこと』単元計画作成チェックリストの使用有無が教師の授業づくり観に及ぼす影響の研究、第130回全国大学国語教育学会新潟大会発表、2016年5月、新潟大学
鎌田 首治朗、『読むこと』の授業のための目標分析試案 (3) 小学校国語科「読

むこと」単元計画作成チェックリスト、
第129回全国大学国語教育学会西東京大会
発表、2015年11月、創価大学

鎌田 首治朗、『読むこと』の授業のため
の目標分析試案(2) - 小学校国語科『読
むこと』の授業モデル、第128回全国大学
国語教育学会兵庫大会発表、2015年5月、
姫路市

鎌田 首治朗、『読むこと』の授業のため
の目標分析試案 小学校国語科の場合、
第127回全国大学国語教育学会筑波大会発
表、2014年11月、筑波大学

〔図書〕(計7件)

梶田 叡一、中刈 正堯、鎌田 首治朗、
伊崎 一夫、山下 敦子、汐海 治美、永田
里美、湯峯 裕、勝見 健史、加藤 明、瀧
明 知恵子、蔵 あすか、教育フォーラム53
号/言語活動 「読み」「書く」の力を中
心に、2014、金子書房、pp.25-36

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鎌田 首治朗 (KAMADA, Shujiro)
奈良学園大学・人間教育学部・教授
研究者番号: 40599354

(2) 研究分担者

高木 悠哉 (TAKAKI, Yuya)
奈良学園大学・人間教育学部・講師
研究者番号: 40572350